

# 社会主義社会における 分業廃棄の端緒形態

小 嶋 正 巳

## 1 ブルジョア社会における分業の発展と労働疎外

興隆期のブルジョア・イデオログの代表者であるA.スミスは、その主著「国富論」を分業から説きおこしている。このことは、重要な意味と十分な根拠をもっている。

分業とは、つまるところ労働の単純化である。分業の発展は、一人の人間が一つの製品をはじめからしまいまでしあげてを不可能にするかわりに、単純化され・規格化され・部品化された労働をいかなる製品の生産過程にもあてこむことができるようにする。それは、一方では、どのような複雑な製品にも不熟練労働力を投入することを可能にするとともに、他方では、単純化を媒介にして人間労働を機械にかたがわりさせることを可能にする。分業の発展は、この二つのやりかたをおしすすめることによって、生産力を飛躍的に増大させる。生産力の飛躍的な増大は、また分業を発生させる基盤それ自体を拡大し<sup>①</sup>、そのことがさらに生産の機械化・生産力の発展に加速度をつける。ブルジョア社会とは、つまりこのような分業による人と人との相互依存関係を最高の形態・ヘーゲルのいう『完全な必然性』にまでおしすすめた社会である。

ブルジョア社会において、分業はその頂点までのぼりつめる。ということは、とりもなおさず生産手段の私的所有の基礎のうえにきずかれた分業の矛盾もまた、このブルジョア社会においてその極点にたつすることを意味している。

すなわち、分業の発生と発展の基盤である交換・商品生産・その最高形態で

ある資本制生産は、それが発展すればするほど富の偏在を助長する。一方の極に富を・その反対の極に富と同量の貧困を蓄積する以外の方法では、資本制生産はありえないのである。

ブルジョア社会では、この社会特有の分業の発展によって従来のいかなる歴史的段階にもみられなかった速度で巨大な生産力をつくりだし、それは商品の形態でぼう大な富を集積するが、その富は、当然ことごとくそれをつくりだした生産手段の所有者であるブルジョアジーの手に帰してしまう。生産過程で実際に手足を動かして労働しているのはプロレタリアートであるが、資本制生産のもとでは、それはいうまでもなくブルジョアジーの買いとった労働力商品の使用過程にすぎない。プロレタリアートの生産物は、プロレタリアートにとってなんの発言権もないものである。のみならず、プロレタリアートは、より多く労働すればするほど・またより能率的に労働すればするほど・したがって生産力が発展しブルジョアジーの手により多くの富が集積すればするほど、かれ自身の唯一の所有物である労働力の価値は低下する。商品がふえればふえるほど、プロレタリアートの労働力は安い商品となる。

さらに、資本制生産のもとにおいては、分業の発展が頂点にたっするが、分業が発展すればするほど、労働力における人間的感覚が剝離してゆく。いわゆる『労働の疎外』である<sup>⑨</sup>。

元来、人間は、生産労働をとおして、そしてそれをとおしてのみ人間たりえてきた。人間は、単に自然から恵まれるものだけを本能的にうけとる動物的生存から脱し、道具をもって自然にたちむかい・自然を変革し・自然と対立し・それを征服する生産労働をはじめることによって、はじめて自分を主体として認識し・自然を対象として認識するようになる。人間は、道具をつかう生産労働をとおして、本能とは区別された経験と熟練をつみかさね、さらにそこから工夫と創意をひきだし、そのような工夫や創意が自然の変革＝生産労働により大きな効果をもたらすようになればなるほど、人間はより明確に自然から独立し、その自然からの独立が人間としての主体を確立する。

と同時に、その人間としての主体の確立が、自然を他の動物とまるでちがう

感覚でみる人間の眼・人間的な眼をつくりだすのである。人間の眼は、人間の生産労働のなかで人間的な眼となったのである。だから、人間的な眼でみられる対象は、単なる人間の外にある客観的存在が鏡に反映しているのではなくて、生産労働のなかで蓄積された人間性を瀟過しているからこそ、花をみて美しいと感じとられるのである。つまり、人間的な眼とは、単に花をみるのではなく、花の中に人間をみ、人間化された花をみるのである。マルクスが『対象的世界の実践的産出・非有機的自然の加工』<sup>③</sup> といったのは、このような意味であろう。これが人間的感性であり、この人間的感性は、人間の実践的な生産活動をその形成の土台にしており、人間の実践的な生産活動が多彩になり高度になればなるほど、人間的感性もよりゆたかな深みと精彩のあるものになってゆく。『対象が人間にとって人間的な対象あるいは対象的な人間となるばあいだけに、人間はかれの対象のなかで自己を失うことがない』<sup>④</sup> というマルクスのことばは、まことに玩味に値いする。

ところが、『対象が人間にとって人間的な対象あるいは対象的な人間となる』のは、かれの生産労働が人間的なものであり、労働のなかで工夫と創意をこらし・自然の法則を見つけ・それをとおして自分自身を確認してゆくからであるが、分業の発展は、この労働と人間性との相互促進的なかわりあいにわりこんで、そこに超えがたい壁をつくりはじめる。

分業は、もともと社会的生産労働の発展それ自体の要求としてうみだされたものであり、それによって生産力は飛躍的に発展するものであるが、分業の発展は、同時にまず労働をとおして人間が能動的にかかわりあう世界を限定し・縮小する。工業・農業・商業その他いわゆる社会的分業が発展し、各個人が特定の職業に専従するようになると、各個人は自分の職業によってほりさげた井戸の奥から天をあおぎみることしかできなくなる。

しかし、社会的分業の範囲内においては、固定され・限定されたものであってもまだその労働を人間的に遂行しうる余地がある。この社会的分業がさらに発展し、大規模な商品生産の一般化・および生産手段の生産者の手中への一定程度の集積が達成されると、いわゆる作業場内の分業・工場内分業があらわれ

る。この工場内分業は、本節の冒頭にのべたように、徹底的に労働を単純化するところまでおしすすめられ、その単純化を契機として機械にとりかえられ、それがもっとも巨大な生産力の発展をもたらした。ここにおける単純化とは、とりもなおさず労働における人間性の駆逐であり、労働のなかから人間的なものを除去しただけ労働が単純化される。『反省と想像力とは誤謬を生じがちである。……だから、マニュファクチュアがもっとも繁栄をきたすのは、作業場が人間をその部分品とする一機械とみなされうるほどに人々がもっとも放心状態にあるばあいである』<sup>⑤</sup>。

人間の『反省と想像力』をまったく不要にしたからこそ、作業を機械にわたすことができるのである。機械の働きというのは、その全体がどのように複雑で微妙で高級なものにみえようとも、結局人間的なものをまったく駆逐された単純な作動のぼう大な集積にすぎず、だから機械は、それ自体が自己を確立し・あるいは自己と外的対象を区別して認識するようなことはけっしてない。

人間労働がこのように機械にひきわたされるところまで分割されると、つまりそれが工場内分業のゆきつくところであるが、生産力の発展が人間的なものをふかめてゆく土台となるどころか、逆に人間性を犠牲にすることによって生産力が発展し、生産力の発展に比例して、それにむすびつけられている人間労働を空疎なものにしてしまう。工場内分業が頂点にまで発展し・機械が生産を支配している大工場制工業においては、労働と人間性の相互促進的なかわりあいなどというのは、太古の牧歌的なメルヒエンになってしまう。

ブルジョア社会のプロレタリアートは、この『疎外された労働』を貧困の蓄積と一つに束ねて強制されるのである。『労働疎外』は貧困によって現実的な実感をもたらし、貧困はまた『労働疎外』によって一層非人間的なものにしたてられる。

さきにブルジョア社会において分業の矛盾が極点にたつるといったのは、以上のような意味である。

⑤ 『この分業なるものは、……ある物を他の物と取引し、交換し、交易する傾向の結果である』。『分業を発生せしむるものは交換力であるから、分業の範囲は、その

力の大きさ、言葉をかえていえば、市場の広さによってつねに制限されざるをえない』。A. スミス「国富論」・大内訳岩波文庫版第1分冊・38頁および45頁。

- ② 『分業は、疎外の内部での労働の社会性についての国民経済学的な表現である。いかえれば、労働は外化の内部での人間的活動の一表現、生命外化としての生命発現にすぎないのであるから、分業もまた、実在的な類的活動としての、あるいは類的存在である人間の活動としての、人間的活動が、疎外され外化されて定立されたもの以外のなにものでもないのである』。K. マルクス「経済学・哲学草稿」・城塚・田中訳岩波文庫版・168頁。
- ③ 『対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。すなわち人間が、類にたいして、自分自身の本質にたいするようふるまい、あるいは自己にたいして、類的存在にたいするようふるまう存在であることの確証である』。K. マルクス・上掲書・96頁
- ④ K. マルクス・上掲書・138頁。
- ⑤ K. マルクスによって引用されたA. フェーガソンのことば。「資本論」・長谷部訳青木文庫版第1部第3分冊・599頁。

## 2. 分業の廃棄と労働の解放

前節にのべた分業の発展とその帰結は、いうまでもなく、私有財産制の基礎のうえに・それを不可欠の直接の前提として形成されてきたものである。

K. マルクスは、社会的分業は対立する二重の出発点から発生するといっているが<sup>①</sup>、その第一の出発点・生理的自然発生的分業は、第二の出発点・独立した共同体間の剰余生産物の交換からはじまる商品交換とあい関連しながらそれに併合され、共同体内部の労働相互の関連＝社会的分業も、また商品交換によって媒介されることになる<sup>②</sup>。したがって、社会的分業は、その出発点の一つ（生理的分業）においては商品生産なしにありえても、社会的分業が形成された段階においては商品生産なしにはありえない。

この商品生産の一般化を存立条件とし、かつ生産者の手中における生産手段の集積を前提として、工場内分業が形成される。工場内分業では、各部分労働者はなんらの商品も生産せず、かれらの共同生産物がはじめて商品になるのであって、だからかれらを結びつけているものは、商品交換ではなくて、おなじ資本家にその労働力を売ったということである。この意味では、工場内分業

は、労働力を商品化するブルジョア社会においてはじめてあらわれる。

商品生産は、私有財産制のもとにおける私的労働に社会的性格をあたえる唯一の方法であり、労働力の商品化は、商品生産ののぼりつめた表現である。したがって、分業の発展から直接的にひきだされる『労働疎外』は、より根元的な意味では商品生産・さらにはその基盤である私有財産制の本質からもたらされたものであり、私有財産制そのものの矛盾のあらわれである。

それゆえに、K. マルクスが共産主義を規定して『人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義、それゆえに、社会的すなわち人間的な人間としての人間の、意識的にうまれてきた、またいままでの発展の全成果の内部でうまれてきた完全な自己還帰としての共産主義、』<sup>③</sup> というとき、またかれが『全革命運動がその経験的基礎をも理論的基礎をも、私有財産の運動のなかに、まさに経済の運動のなかにみいだす』<sup>④</sup> というとき、当然、その私有財産の止揚』の核心的な部分として、分業の廃棄・分業の止揚のおもいがこめられている。『私有財産の止揚』とは、単に生産手段の公有制を実現することではなく、それは最初の出発点であり、基礎工事にすぎず、目的である『人間の本質の現実的な獲得』のための主要な作業は、分業それ自体およびそれがもたらした労働疎外・さらにそれから派生しているあらゆる上部構造を廃棄し止揚することにある。

この分業の全面的廃棄が『私有財産の止揚』の主要な内容であり、共産主義へいたるみちすじであるとすれば、それは、具体的にどこからどのようにはじまり、いかなる過程をへてその目的とするところにゆきつくのか。このことについては、プロレタリアートの世界観の最初の完成者 K. マルクスと F. エンゲルスが貴重な包括的な示唆をあたえているが、その体系的・全面的な理論化と歴史的事実証は、プロレタリアートが実際に権力を掌握し、社会主義建設の実践がはじまる時期までまたなければならなかった。

K. マルクスと F. エンゲルスの示唆は、包括的であるがゆえに厳密に原則的・法則的に表現されており、またそれゆえにのちに体系的全面的な理論化に

さいしてその背骨として確立されることになる。この意味において、周知のところであるが、つぎに引用しておく。

『生産手段が社会によって掌握されるとともに、商品生産が除去され、それと同時に、生産者にたいする生産物の支配が除去される。社会的生産内の無政府状態は、計画的・意識的な組織にとってかわられる。個人的生存のための闘争はやむ。こうしてはじめて人間は、ある意味で、動物界から決定的に分離し、動物的な生存条件から真に人間的な生存条件にはいりこむ。いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件という外囲は、いまや人間の支配と統制のもとにはいり、人間はここにはじめて自然にたいする意識的なほんとうの主人となる。……このときからはじめて、人間はかれらの歴史をば、十分な意識をもって自分でつくるようになる。このときからはじめて、人間によってうごかされる社会的諸原因は、主として、ますますすばらしい程度で、人間の欲するままの結果をうむことになる。これは必然の国から自由の国への人類の飛躍である』<sup>⑥</sup>。

『社会は、全生産手段の主人公となり、これを社会的に計画的に利用することによって、これまでのように人間が自分自身の生産手段の奴隷となることを根絶する。もちろん社会は、各個人が解放されるのでなければ、自分自身を解放することができない。だから旧来の生産様式は根底から変革されなければならないし、またとりわけ旧来の分業は消滅しなければならない。そのかわりに、一つの生産組織があらわれなければならない。そこでは、一方では、どんな個人も人間生存の自然的条件である生産労働のうちの自分のわりあて分を他人に転嫁することができず、他方では、生産的労働が各個人にたいしてその肉体的ならびに精神的な全能力をあらゆる方向に発達させ活動させる機会を提供することによって、それが人間を奴隷化する手段となるかわりに人間を解放する手段となり、こうして生産労働が重荷から快樂にかわるのである』<sup>⑥</sup>。

『共産主義社会のより高い段階で、すなわち個人が分業のもとに奴隷的に隷属している状態がなくなり、したがってまた精神労働と肉体労働との対立がなくなったとき、また労働がたんに生活のための手段ではなく、労働そのものが

生活の第一の欲求となったのち、個人の全面的な発展とともに、生産力も増大して、協同組合的富のあらゆる噴泉があふれでるようになったのち——そのときはじめて、せまいブルジョア的権利の地平線は完全にふみこえられ、社会はその旗のうえにこうかくことができる。各人は能力におうじて、各人にはその必要におうじて！』<sup>⑧</sup>。

この『人間が十分な意識をもって自分でつくりはじめる』人類の本史は、プロレタリアートが独裁権力を掌握したときからはじまるが、『ここで問題になるのは、それ自身の基礎のうえに発展した共産主義社会ではなく、反対に、いまやと資本主義社会からうまれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも、道徳的にも、精神的にも、それがうまれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだくっつけている』<sup>⑨</sup>。

『資本主義社会と共産主義社会のあいだには、前者の后者への革命的転化の時期がよこたわっている。それに照応するものはまた政治上の過渡期であって、その国家はプロレタリアートの革命的独裁にほかならない』<sup>⑩</sup>。そして、『この社会主義は、連続革命を宣言し、プロレタリアートの階級的独裁を実現し、この独裁をかならずへなけければならない移行の段階として、階級の差異を根本的に一掃し、これらの差異をうむいっさいの生産関係に適應するいっさいの社会関係を一掃し、これらの社会関係からうまれるいっさいの観念をかえることをめざすものである』<sup>⑪</sup>。

以上のことばから明らかなとおり、『私有財産の止揚』の全過程は、プロレタリアートの権力掌握・プロレタリアート独裁の樹立をてこととして、生産手段の私的所有を廃棄し・それを公有制にうつしつつ、この経済的基礎の変革を土台として、その上部構造における旧社会の母斑を一つ一つ払拭してゆくところからはじまる。この過程は、最後の階級社会・分業の発展が極点にたった社会・したがって労働疎外が極点にたった社会である資本主義社会からその反対物である階級が止揚され・分業が廃棄され・労働が解放される共産主義社会への過渡期であり、それゆえにまたこの時期は、『この二つの社会経済制度の特長または特性を一つに結合したものとならざるをえず、死滅しつつある資本



主義とうまれでようとする共産主義との闘争，いいかえれば，うちやぶられたが絶滅されていない資本主義とうまれはしたがまだまったくひよわい共産主義との闘争の時期とならざるをえない』<sup>①</sup>。

したがって，プロレタリアート独裁を軸とする生産手段公有制の実現・それを土台とする上部構造における旧社会の母斑の払拭・そしてそのなかから『私有財産の止揚』の核心である分業の廃棄＝労働の解放の最終的な達成を実現する全過程は，同時にまた激烈な階級闘争の過程として展開される。逆にいえば，プロレタリアートの権力掌握後のこの階級闘争の展開過程において，その闘争をおしすすめるプロレタリアートの革命的階級意識のなかから，はじめて労働の解放を最終的にかちとるための分業廃棄の具体的な契機がつかみだされてくるのであり，かくて，ここにおいて，マルクス・エンゲルスがさしめした包括的・抽象的な真理が具体的でいきいきとした生命力をあたえられ，実践的な指針として体系化されてくるのである。

それでは，つぎにこのことをいいますこしつっこんでみてみよう。

- ① K. マルクス「資本論」・長谷部訳青木文庫版第1部第3分冊・385頁。
- ② K. マルクス『諸物がひとたび対外的共同生活において商品となるやいなや，それらは反応的に，内部的共同生活においても商品となる』。上掲書・第1部第1分冊・196頁。また『生理的分業が出発点をなすばあいには，直接的に結ばれた一全体の特殊の諸器官が相互に分解し，分裂し——この分裂過程に主要衝動をあたえるものは他の共同体との商品交換である——自立化して，ついに，相異なる諸労働の関連が商品としての諸生産物の交換によって媒介されるにいたる』。上掲書・第1部第3分冊・586頁。
- ③ K. マルクス「経済学・哲学草稿」・城塚・田中訳岩波文庫版・130頁。
- ④ K. マルクス・上掲書・131頁。
- ⑤ F. エンゲルス「反デューリング論」・邦訳大月書店版 マルクス・エンゲルス選集第14巻・477頁。
- ⑥ F. エンゲルス・上掲書・492～493頁。
- ⑦ K. マルクス「ドイツ労働者党綱領評註」・上掲書第12巻・243～244頁。
- ⑧ K. マルクス・上掲書・241頁。
- ⑨ K. マルクス・上掲書・254頁。
- ⑩ K. マルクス「フランスにおける階級闘争」・上掲書第5巻・117頁。

- ⑩ I. レーニン「プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治」・邦訳大月書店版レーニン全集第30巻・94頁。

### 3 社会主義的公有制の実現と旧社会からもちこされる分業体制

社会主義革命によってプロレタリアート独裁がうちたてられると、その権力をてこととして、ただちに生産手段の公有制への移行がはじまる。

これまでの歴史的経験を一口でいえば、社会主義革命によってうちたおされるまでのブルジョアジー独裁の直接的基礎をなしていた巨大な私的資本および国家資本は没収されて一挙に全人民所有に移行し、それらの巨大資本に抑圧され搾取される側面をもっていた相対的に零細な私的資本（したがって政治的には、プロレタリアートを核とする統一戦線にくわわる可能性をもつ私的資本）および小規模小商品生産のための私的所有の生産手段は、一挙に没収というかたちではなく、『自願自利』というかたちでしだいに集団所有に移行し、あるいは『買いもどし』というかたちでしだいに全人民所有に移行してゆく。

その具体的な形態は、客観的な条件としては、プロレタリアート独裁をうちたてた国民経済の歴史的な構造、とりわけ資本主義の発展の程度によって制約されるし、主体的な条件としては、その国のプロレタリアートの力量（つまり、この公有制への移行はいうまでもなく全面的な階級闘争としてあらわれるのであるが、この階級闘争を指導してゆくプロレタリアート・その核心としての前衛党の力量）に依拠して多様なみちすじをとる。

多様なみちすじをとるが、しかし歴史的な経験としては、プロレタリアートが権力を掌握してのちそれほど長い年月をかけずに・せいぜい10年前後で、基本的生産手段について主として工業部門のそれを全人民所有に、主として農業部門のそれを集団所有に移行しおえた。そして、そのことを指標として、従来、社会主義革命が基本的になしとげられ、社会主義経済の基礎が確立されたといわれてきた。

社会主義革命の基本的視点をプロレタリアート独裁による生産手段の私的所有の廃棄におき、社会主義経済の基礎を人が人を搾取することを廃絶し、無政

府的生産のかわりに計画経済を実現するという点にもとめるならば、たしかに、上記の社会主義的公有制の実現は、社会主義革命の基本的勝利・社会主義経済の基礎の確立の指標たりうる。

しかしながら、マルクス・エンゲルス・レーニンがそういつているように、社会主義を資本主義から共産主義への移行の全過程としてとらえ、その内容を人間的労働の・したがって労働する人間の最終的な解放をかりとることとみなし、そしてそのための基礎的な作業として従来の分業の解体＝廃棄を『私有財産の止揚』の核心として考えるならば、社会主義的公有制の実現は、搾取を廃絶したという意味で社会主義革命の重要な一段階を画するものではあるが、そしてその実現なしにその後の発展はありえないのではあるが、同時に、それだけでは社会主義革命の核心的な事業にまだはいっていないといわなければならない。

実際、上記のような社会主義的公有制が実現した段階・従来社会主義革命が基本的に勝利し社会主義経済の基礎が確立したといわれた段階においては、すくなくとも外見上は、社会的分業も工場内分業もまだほとんどそっくりそのまま旧社会のそれがもちこされておき、均衡をとり計画的にくみたてられているという意味では、旧社会のそれよりも整備発展せしめられているといってもよい。分業の廃棄は、生産手段の所有制の変革それ自体の異なる側面、つまり所有制変革というメダルの裏側ではなく、また所有制変革と同時にそれと平行して自然成長的にあらわれてくるものでもない。それは、生産手段の私的所有の廃棄を不可欠の前提としつつ、その土台のうえであたらしく展開される階級闘争として提起されてくるのである。

すなわち、前述の全人民所有と集団所有の二つが併列するかたちの社会主義的公有制は、いうまでもなく、社会主義的公有制の完成した形態ではない。とくに集団所有制は、社会主義的公有制を実現するための不可避の形態であり、また生産手段の私的所有にもとづく搾取を廃棄しているという意味では完全に社会主義的範疇に属するものではあるが、しかし他方においては、集団所有の各单位相互間あるいは集団と全人民所有制（国家）のあいだの物資の交流は、

異なる所有者間の物資の移転であるから、それは必然的に商品交換たらざるをえない。したがって集団所有の各単位が交換にあてるために生産するものは商品生産であり、全人民所有制の側においても、集団所有の各単位にひきわたす部分は商品として生産される<sup>①</sup>。この商品生産は、生産手段の私的所有およびそれを基礎とする搾取制度ときっぱり絶縁しているのではあるが、しかし価値法則が作用する商品生産が現実存在している以上、やはりそれ自体が社会的分業を生成発展させ、さらにすでに形成された社会的分業を確保する強固な城壁となる。

この生産手段の公有制の最初の実現形態が全人民所有制と集団所有制の併列というかたちをとるのは、旧社会の分業体制の不可避の直接的なもちこみである。

くりかえすまでもなく、資本主義社会における巨大な生産力の発展は、労働生産物の私的所有と価値法則の規制にもとづく社会的分業および工場内分業の極度の発展におっている。そこでは、商品・貨幣関係を媒介とした分業をぬきにした社会的生産はまったくありえない。またそこでは、『労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬけだすことができない。かれは、狩人・漁夫か牧人か批判的批判家かであり、そしてもしかれが生活の手段をうしなうまいとすれば、どこまでもそれでいなければならない』<sup>②</sup>。かれを一定の専属の活動範囲＝職業におしつけるために社会のあらゆる上部構造・とりわけ教育とイデオロギーの分野が動員されている。資本主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲だけしかもてないよう教育し、分業を超階級的なものとおもいこませるよう宣伝し、『職業に貴賤はない』というブルジョア民主主義のスローガンで支配と被支配・搾取と被搾取の関係を隠蔽してきたのである。

その結果、巨大な生産力の発展とひきかえに、総じていえば、都市と農村・工業と農業・さらには頭脳労働と肉体労働のあいだに他のいかなる歴史的時期よりも深刻なみぞをほりこみ、生産力の格差をつくりあげ、この一朝一夕にうめることのできない対立と格差が、生産手段の私的所有を廃棄するさい、全人

民所有と集団所有の二つの形態を併列することを不可避とし、また労働生産物を分配するさい、その生産力の格差に応じて、つまり労働に応じて分配することを必然たらしめたのである。

この旧社会の母斑は、プロレタリアートの権力奪取のさい必然的に遭遇する経済状況によって、社会主義社会へもちこされる重さをますことになる。

すなわち、プロレタリアートの蜂起は、その社会の経済的矛盾が爆発し生産と生活が破壊され、経済が極度に混乱してくることから直接的にうながされるのであり、さらにまた権力奪取の過程は、歴史上例外なく戦争あるいは内乱から革命へというかたちをとることからその混乱と破壊は倍加され、とくに『平民の無頼漢』に生産手段をのっとられることをこぼむブルジョアジーの意識的な生産破壊は頂点にたつする。

したがって、プロレタリアートが権力を掌握した時点は、旧社会のいかなる時期よりも経済が破壊され荒廃した時点であり、プロレタリアートの権力の最初の具体的な緊急任務は、これも歴史上例外なくまず第一に生産の復興であり、他のすべての社会主義的政策は、生産の急速な回復・発展とかみあわせ、それを優先してくみだてられる。この緊急の要求が、旧来の分業を保存してゆく圧力となるのである。生産の回復・発展のためにあらゆる要素が動員され、それがもっとも急速に効果をうむよう組織される。旧来の分業の解体に着手する余裕はなく、逆にそれをもっとも能率的に利用するよう要求される。

かくて、社会主義的公有制が実現した最初の段階では、すくなくとも外見上は、旧来の分業がほとんどそっくりそのまま、むしろ旧来のそれよりも均衡をとり計画的にくみだてられてもちこされ・発展せしめられるのであるが、しかし、その分業体制は、本質的にはけっして旧来のそれとまったくおなじものではない。

なによりも社会主義社会では、分業の基礎である商品生産がもちこされているとはいえ、商品生産のもっとも本質的な基礎である生産手段の私有制を廃棄している。そこでは、直接生産者（プロレタリアートおよび農民階級）の指導権が確立され、支配と搾取の制度が基本的にはすでに除去されている。またこ

のプロレタリアート独裁権力の確立によって、分業のもたらす矛盾は、基本的には敵対的な性格のものから人民内部の矛盾に転化している。さらに経済の計画化は、一方では、分業を一層整備・発展もさせるが、他方では、消極的にもせよ分業がもたらす矛盾をあるていど調整する役割をもはたすことができる。したがって、社会主義的公有制が実現した最初の段階では、そこでの分業体制は、外見上旧社会のそれよりもむしろ整然とみえるにしても、実際は、その基礎・土台において上述のような質的な変化がみられる。

この土台の質的变化は、単に分業のもたらす矛盾を敵対的な性格から人民内部の矛盾に転化させただけにとどまるものではなく、それは分業体制が社会主義社会にとって必要で不可避の段階においてのみいえることであり、もっと長期の観点・つまり共産主義への移行の全過程からいうと、この土台の質的变化は、あきらかに旧来の分業とまっこうから対立し矛盾する要素の生成・発展を意味している。

このような土台におけるあたらしい要素を内包しながらも、社会主義社会の初期においては、現実的には主として生産力の急速な発展の不可避の要求から旧来の分業体制が一層整備されて発展せしめられるのであり、同時にまた、その生産力の発展を物質的基礎として社会主義改造がおしすすめられ、社会主義改造がすすめばすすむほど、土台における旧来の分業体制と矛盾するあたらしい要素の生成・発展をうながすことになるのである。この旧社会からもちこされた分業とそれとあいれないあたらしい要素との矛盾は、一定の段階をへて成熟し、表面化し、社会主義社会にあたらしい問題を提起する。この問題は、いうまでもなく、根本的には旧社会の残存物、つまりブルジョア的要素とうまれたばかりのあたらしい要素・つまり共産主義的要素との矛盾・対立・闘争であるから、当然、具体的な階級闘争として提起される。

社会主義社会における階級闘争の必然性については、多言を要しない。『資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代がおわらないあいだは、搾取者には必然的に再興の望みがのこされていて、この望みは再興の企てに転化する。そして、最初の重大な敗北ののちには、自分がうちたお

されることを予期せず・そうしたことを信ぜず・またそれについて考えようとさえしなかった・うちたおされた搾取者どもは、十倍の精力と狂暴な熱情と百倍にもましたにくしみをもって、奪いとられた「楽園」をとりもどすために……戦闘に身を投じる』<sup>①</sup>。

社会主義社会がうちたてられたばかりの段階の階級闘争においては、このレーニンのことばの文字どおりに、うちたおされはしたがまだ消滅してはいない資本家や地主が直接にプロレタリアートと農民のまえにたちはだかる。だが、激烈な闘争の過程をとおしてかれらがしだいに敗北し後退してゆくにつれて、つまり社会主義改造の進展につれて、この階級闘争の前面には、直接に資本家や地主がでてくるかわりにその意を体した代理人をおしだしてくる。同時に、かれらの『再興の企て』も、いたけだかな『楽園』の直接回復の要求から、しだいに旧社会の残存物のこれ以上の掃蕩を拒否し、そしてそれを拠点にして共産主義への前進をくいとめ、逆に社会主義の面貌をつけたまま実質を資本主義へひきもどすという方向をとりはじめる。

一般的にいえば、前述の分業廃棄の階級闘争は、このような階級闘争の局面で提起されてくる。それは、社会主義建設が一定の段階にたったのちあらわれはじめるところの、社会主義社会の階級闘争のあたらしい段階である。そこでは、ブルジョアジーの側の代表選手は、ブルジョア自身よりもプロレタリアートの陣営にもぐりこんだ代理人のほうが重要な役割を演じ、またプロレタリアートの分業に慣習づけられた意識自体が革命の対象になることから、闘争をきわめて複雑・尖鋭なものとすると同時に、従来以上の重要な意味をもって思想・文化・教育の分野が激烈な戦場となる。

この点をさらにほりさげてみよう。

- ① 社会主義社会における商品生産の必然性は、もとより本文で指摘した社会主義的公有制における二つの形態の併存からだけひきだされるものではない。生産手段は基本的に公有化されているが、生活消費手段は私的所有にゆだねられている。労働者・農民は、自分の生活消費手段の大部分を商品として購入する。生活消費手段の私的所有・したがってその商品化は、根本的には社会的労働に格差が存在していること、したがって社会主義的分配原則として労働に応じた分配が貫徹することの不可避の反映で

あり、恣意に廃絶することはできない。また全人民所有制の各生産単位相互間の物資の交流および生産単位内部の経済活動を管理するにあたっては、やはり社会的労働に格差が存在することから価値法則を利用し・貨幣関係を利用することが必要かつ不可避である。そこでは物資の交流は所有者の交替をともなわないが、外観上は売買の形式をとり・価値法則を利用して計算され、したがってそれらの物資は商品としての外被をつけることになる。これらの問題が社会主義的公有制の二つの形態の併存と関連しあっているのであるが、このことについては本論文ではたちいらず、社会主義企業管理の問題をあつかう別稿にゆずる。

- ② K. マルクス「ドイツ・イデオロギー」・邦訳大月書店版マルクス・エンゲルス全集第3巻・29頁。
- ③ I. レーニン「プロレタリア革命と背教者カウッキー」・邦訳大月書店版全集第28巻・269頁。

#### 4 社会主義社会における分業廃棄の端緒形態

前節において、分業廃棄にいどむ階級闘争は、プロレタリアート独裁権力樹立の直後から全面的に展開されるのではなく、最初は、生産力の急速な回復・発展および生産手段の社会主義的公有制の実現に力がつくされること、そして、その生産力の発展と社会主義的公有制の基本的実現が分業廃棄の物質的基礎を提供し、あたらしく具体的に分業廃棄にたちむかわせる問題を提起して行くことをのべた。

しかしこのことは、社会主義建設の・したがってまた社会主義社会における階級闘争の主要な側面について総括的にいったのであって、社会主義社会の初期における階級闘争が旧社会からもちこされた分業にたいする闘争を包括していないという意味ではない。それどころか、プロレタリアートが権力を掌握したのちもひきつづく階級闘争は、そのはじめから明確に分業の廃棄をめざす長期のみとおし、つまり共産主義への移行とむすびつけて展開されなければならず、またそのような階級闘争の路線のみが、社会主義建設の歴史的な勝利をかちとってきたのである。

たしかに社会主義の一定の段階の戦略目標が生産力の急速な発展および社会主義的公有制の実現におかれ、すべての人的・物的要素の動員がその戦略目標



に集中されるにしても、その動員と集中のしかたは、それ自体が共産主義への一歩前進の方向にそったものでなければ、生産力の発展にしても社会主義的公有制の実現にしても、意味のないものになってしまうであろう。

究極の目的は、真の労働の解放・人間の解放にあり、旧社会においてそれを束縛していた要素を不可避免的に『利用』しなければならないにしても、その『利用』は同時に『制限』とむすびついていなければならない、さらにその『制限』の方向は『改造』にいたるものでなければならない<sup>①</sup>。この『利用・制限・改造』の過程において、それぞれの環節が順次に主要な側面を形成し、それぞれが他と区別された一つの段階を形成するが、プロレタリアートが主導権をもち自らの解放をめざす階級闘争であるかぎり、その全過程をとおして一貫した路線があり、真の労働の解放＝共産主義労働をめざす後退することのないあゆみがある。

旧来の分業の『利用・制限』の段階ですでにあらわれてくる『改造』の萌芽を、ここで分業廃棄の端緒形態とよぶことにしよう。それでは、この『利用』の段階の端緒形態は、どのようにあらわれるのか。

それは、分業それ自体にたいする直接的な攻撃としてではなく、まず社会主義的労働規律の確立としてあらわれてくる。具体的事例をあげていえば、もっともはやくあらわれた歴史的典型として、1919年5月10日の土曜日にモスクワ＝カザン鉄道の労働者によってはじめられた『共産主義的土曜労働』をあげることができる。

この労働者自身の『偉大な創意』について、レーニンは、つぎのように評価した。すなわち、『あきらかに、これはまだ端緒にすぎない。だが、それは異常に大きな重要性をもった端緒である。それは、ブルジョアジーの打倒よりもっと困難な、もっと本質的な、もっと根本的な、そしてもっと決定的な転換の端緒である。なぜならば、それは、固有の沈滞と無規律と小ブルジョア的エゴイズムとにたいする勝利であり、のろうべき資本主義が遺産として労働者と農民にのこした因習にたいする勝利だからである。将来この勝利が強化される時、そのときにはじめて、あたらしい社会的規律、社会主義的規律が創造さ

れるであろう。そして、そのときにはじめて、資本主義への復帰は不可能となり、共産主義は真に不敗のものになるであろう』<sup>②</sup>。

レーニンは、この『土曜労働』を『労働生産性の発展における、あたらしい労働規律への移行における、そしてまた経済および生活の社会主義的諸条件の創造における労働者たちの意識的・自発的な創意』<sup>③</sup>、『共産主義の事実上の端緒』<sup>④</sup>と評価したが、それはいうまでもなく分業を直接的に解体しようとするものではない。それを端緒にしてその直線的な延長線上にみえる共産主義的事物は、共産主義的労働規律であり、レーニンのいう共産主義的労働である。

レーニンは、共産主義的労働について、つぎのように定義している。すなわち、『狭義の厳密な意味では、共産主義的労働とは、社会のための無償労働であり、ある特定の義務をはたすためにではなく、ある特定の生産物にたいする権利をうるためにではなく、また、あらかじめ規定された法定の基準作業量によることなしにおこなわれる労働、自発的な労働、作業基準量なしの労働、報酬をあてにしない、また報酬について条件のない労働、公共の利益のために働くという習慣と、公共の利益のために働かなければならないことを自覚した（そして習慣となった）態度にもとづく労働のことであり、健全な身体の欲求としての労働のことである』<sup>⑤</sup>。『土曜労働』（それに象徴しうる他の社会主義諸国の社会主義建設のはじめからさまざまな形態であらわれた社会主義的労働の高揚をすべてふくめて）は、直接的にはこの共産主義的労働の端緒形態をなすものである。

このレーニンが規定した共産主義的労働の実現は、分業の廃棄と不可分の関係にある。旧来の分業が消滅し、そのかわりにあたらしい一つの生産組織があらわれ、『一方では、どんな個人も人間生存の自然的条件である生産労働のうちの自分のわりあて分を他人に転嫁することができず、他方では、生産労働が各個人にたいしてその肉体的ならびに精神的な全能力をあらゆる方向に発展させる機会を提供する』<sup>⑥</sup>ような条件が保障されて、つまり分業の廃棄を前提として、はじめてレーニンのいう共産主義的労働が完全に実現するのであり、同時にまた、レーニンのいう共産主義的労働がしだいに自覚的に形成されてゆく

ことが分業廃棄の主体的な推進力となるのであり、このような共産主義的労働をやりとげる主体をぬきにして分業の廃棄はまったくありえない。

このような意味において、『土曜労働』に象徴されるような労働者の自覚的な労働規律の高揚は、それが旧来の分業の枠内で組織され、旧来の分業にたいする直接的な攻撃をふくんでいないとしても、共産主義への移行＝分業の廃棄＝真の労働の解放の全過程の連続的な観点からすれば、あきらかに分業廃棄の最初の端緒形態の意味をもつと評価しうるであろう。

上述の行論のなかですでに示唆しているように、『共産主義的土曜労働』というのは、一つの象徴的な典型であって唯一の形態ではなく、それは、それぞれの社会主義国の最初の社会主義建設の高揚期において、その国の主体的・客観的条件に照応してさまざまな創意をこらした自発的な大衆運動の形態をとってあらわれる。たとえば、中国の解放直後における『新記録創造運動』、ひきつづく抗米援朝の『愛国増産運動』、あるいは朝鮮の朝鮮戦争直後からはじまる『千里馬運動』等、すべて『土曜労働』の本質を自らの運動の核としたものである<sup>①</sup>。

またそれは、上からつくられる制度ではなく、生産現場において自覚した労働者が自発的に情熱的にわきおこす大衆運動であるから、主体的な階級意識のたかまりに応じて、また客観的な物質的基礎の拡大発展に応じて、最初の形態を固定することなく、いのちあるもののように、ときには爆発的に成長し発展をしてゆく。それは、『小さな火花も広野をやきつくす』ようにひろがり、最初は突出したカンパニアであったものが、やがてさまざまな形態の社会主義競争として恒常的に定着するようになり、社会主義労働を組織する一般的・普遍的な形態となる。同時に、その過程において、しだいに深化し高揚してゆく労働者の階級意識が、運動自体を単にあたらしい労働規律の確立だけでなく、分業の廃棄にもっと直接的に接近する手がかりをつかみだす方向にむけてくるのである。

すなわち、周知のように、社会主義社会へもちこされる旧来の分業は、典型的には工業と農業・都市と農村・頭脳労働と肉体労働のいわゆる『三大区別』

となってあらわれる。これにたいして、一方では、計画経済の発展、とりわけ強化された社会主義的公有制の基礎のうえに工業と農業の相互支援の関係がきつめられてくることによって、工業と農業、都市と農村の区別（人民内部の矛盾）を打開するみちすじがまさぐられるようになると同時に、他方においては、それと密接にからみあいながら、社会主義競争の発展、象徴的には『土曜労働』から『スタハノフ運動』への発展によって<sup>⑨</sup>、頭脳労働と肉体労働の区別を克服する積極的な手がかりがつかまれてくる。

後者について具体的にいうと、生産現場の労働者が、社会主義競争の形態をとった自発的な大衆運動をとおして、旧社会とはまったくことなる技術革新運動のにない手となり、生産現場の肉体労働者が自らの生産を管理する労働（頭脳労働）をもひきうけはじめ、同時に、従前の管理人員（頭脳労働者）は、生産現場の肉体労働に参加して自己を一層プロレタリア的に改造するのでなければ、直接生産労働者の管理参加に対応する管理機能の変化についてゆくことすら不可能になる。これは、あきらかに頭脳労働と肉体労働の結合の第一歩であり、分業のうち、とりわけ工場内分業の廃棄に直接的につながってゆく最初の手がかりといえるものである。

もちろん、まだこの段階では、二つの社会主義的公有制が併存しているから、商品生産、したがって社会的分業の基礎は確実に存在している。また、旧社会における頭脳労働が主として人を支配し搾取する労働・肉体労働が主として人に支配され搾取される労働という関係は基本的に清算されたが、頭脳労働と肉体労働を区分する労働力再生産装置の根幹である全日教育制および全日労働制は、ほとんどそのまま旧社会から社会主義社会へもちこされていることから、たえず頭脳労働者と肉体労働者とは分割再生産されている。

それゆえに、たとえ計画経済の発展によって工業と農業・都市と農村の格差をうめる努力がはじまり、社会主義競争の発展によって頭脳労働と肉体労働の結合の端緒がみいだされたとしても、そのことから直線的に分業の廃棄にいたるのではない。分業の廃棄がそれ自体としてはじまるのは、第一に、土台として単一の社会主義的公有制（全人民所有制）が基本的に実現して商品生産の基

礎が完全に廃絶され、第二に、労働と教育が結合されて頭脳労働者と肉体労働者を別個に再生産するしくみを消滅させ、第三に、上記の二つの必然的結果でもあるが、社会的労働の格差を解消して労働に応じた分配を必要に応じた分配に移行させはじめること、このような条件が前提として必要である。しかしながら、そのような前提条件が成熟するのをまてのち、はじめて分業の廃棄がはじまるのではなく、それ以前に旧社会からもちこされた分業が制限しはじめられ、その制限がまた、分業の廃棄の前提条件を成熟させてゆく重要な槓桿となるのである。

すなわち、分業の廃棄＝生産組織の共産主義的改造の過程のまえには、不可避免的に旧来の分業の制限の過程があり、旧来の分業は、『利用』から『制限』をへて『改造』にいたる。上述の社会主義競争の発展のなかから現場の生産労働において頭脳労働と肉体労働の結合があらわれてくることは、この分業（工場内分業）の『利用』を主とする段階から『制限』を主とする段階への発展の端緒形態であり、『利用』しつつ『制限』する具体的形態であり、そのはじまったばかりの『制限』のなかから将来の『改造』のみちすじの展望を内包している形態である。

この旧来の分業の廃棄の全過程＝『利用・制限・改造』において、第一の段階から第二の段階におしすすめる形態、すなわち分業廃棄の端緒形態の第二の段階が、歴史上の経験としてもっとも象徴的・典型的にあらわれるのは、1958年の中国の『大躍進』においてであり、なかんずく『政治優先』の思想にみちびかれた『両参・一改・三結合』の労働形態——体系的には周知の毛沢東による『鞍山鉄鋼公司憲法』に集中的に表現された労働形態である<sup>④</sup>。

そして、この分業廃棄の端緒形態の第二段階が、革命的大衆によって意識的に共産主義への移行のみちすじの端緒の一段階として把握され、その本質的な意味をしっかりと定着させるようになるまでには、レーニンのいうとおり、『階級闘争によって問題を解決』しなければならなかった<sup>⑤</sup>。すなわち、周知のプロレタリア文化大革命である。

この分業廃棄の端緒形態と社会主義社会における階級闘争との関連の問題に

については、稿をあらためて論ずることにする。

- ① 『利用・制限・改造』というのは、周知のとおり、直接的には中国の民族資本家の社会主義改造のさいにかかげられたスローガンである。それをここに援用したのは、わたしは、このスローガンを特殊なものではなく、社会主義社会に不可避にもちこされる旧社会の残滓を変革しあたらしい生産組織に再編成するさいの一般的な法則性を表現していると考えているからである。
- ② I.レーニン「偉大な創意」・邦訳大月書店版全集第29巻・413頁。
- ③ I.レーニン・上掲書・428頁。
- ④ I.レーニン・上掲書・432頁。
- ⑤ I.レーニン「古来の制度の破壊からあたらしい制度の創造へ」・邦訳全集第30巻・538頁。
- ⑥ F.エンゲルス「反デューリング論」・邦訳大月書店版選果第14巻・492頁。
- ⑦ これらの詳細については、拙著『中国社会主義労働の研究』の第4章第1節を参照されたい。
- ⑧ 『土曜労働』は、外国帝国主義の武力干渉と国内戦の危機にさいし、うまれたばかりの社会主義権力をまもりぬくために、モスクワ=カザン鉄道およびモスクワ機関庫の205人の労働者が、1919年5月10日（土）午後6時から完全に自発的にあつまり、自ら組織して無報酬の時間外労働をおこない、機関車4台と車輛16台の修理とつみおろし作業をなしとげたことから始まる。『スタハノフ運動』は、ソ連の第2次5カ年計画による社会主義建設の高揚のなかで、ドンバスの炭坑労働者・A.スタハノフが、1935年8月31日の一交替時間内にノルマの14倍以上にあたる102トンの石炭を採掘し、社会主義労働のあたらしい典型をうちたてたことから始まる。『土曜労働』をなしとげた根本動機は、労働者の革命的意識の高揚であるが、『スタハノフ運動』は、それにくわえて、労働者が自ら主体的にあたらしい技術を完全に掌握することによってなしとげられたものである。A.スタハノフの102トン採掘という記録は、意識の革命化が物質的な力量に転化するということ、プロレタリアートが技術の進歩の主導権を掌握するということが、総括的にいえば人間の意識が人間の歴史をつくりはじめるという法則の最初のみごとな典型ともいえる。『土曜労働』は、『スタハノフ運動』にいたって結実し、あたらしい思想とあたらしい技術を身につけたあたらしい型の労働者と旧社会=階級社会にはあらわれることのなかったあたらしい人間的労働の一形態をうみだした。『土曜労働』から『スタハノフ運動』への発展は、その意味において、人間労働の解放の重要な一歩前進であり、法則にかなったみちすじであるといえる。なお、この発展の歴史における最初の経験をかちとるために、ソ連のプロレタリアートは17年の時間をかけたが、このみちすじがひとたびみいだされると、たとえば中国のプロレタリアートは、『新記録創造運動』・『愛国増産運動』から『節約

運動』をへて例の『大躍進』へと、もっとみじかい時間でもっと高められた質・もっと解放された労働の形態をかちとった。これらの大衆運動の具体的な展開とその評価については、前掲拙著・第4章第2節を参照されたい。

- ⑨ これらの詳細については、やはり前掲拙著・第3章第4節、第4章第3節、および拙稿「プロレタリア文化大革命と社会主義労働」・「東亜経済研究」第42巻第3/4号所収を参照されたい。
- ⑩ I. レーニン「偉大な創意」・邦訳大月書店版全集第29巻・429頁。

## あ と が き

この小論は、「社会主義社会における分業廃棄の端緒形態と階級闘争」というテーマで意図した論稿の前半部分である。わたしは、このテーマの全体において、中国のプロレタリア文化大革命のもつ歴史的意義を労働の解放の側面からつっこんで、初歩的にではあるが一つの観点を提起したいと考えている。

もともとこのテーマは、故岡倉伯士先生によって啓発され激励されてきたものである。わたしは、岡倉先生がなくなられるまで約6年間、先生の隣りに宿舍をあたえられていたが、その間、とりわけ先生がなくなれる直前の半年間、当時評議員であった岡倉先生と補導教官であったわたしとは、その関係でひんぱんに往来があった。そのときの対話は、いつも当面していた学生の学部封鎖の問題から飛躍して中ソの理論問題までおよぶのがつねであった。岡倉先生がなくなれる直前、その頃のわたしのプロレタリア文化大革命に分業廃棄の端緒形態をみいだそうとする構想（拙稿「プロレタリア文化大革命と社会主義労働」・「東亜経済研究」第42巻 第3/4号所収）にたいして、くりかえし長時間にわたって好意にみちた・しかし問題の核心について批判的な御教示をうけた。この小論は、岡倉先生のそのときの御批判におこたえする作業の一部分である。もう先生の声がきけないのが残念であるが、この作業を完成させることによって先生の御批判を消化し、先生の好意にみちた激励にむくいたいと思う。先生の御冥福を心からお祈りします。